

## 平成 29 年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

- 全力！ ICHIOKA**～全日制普通科（単位制）単位制による進路実現への取組み 100%、伝統の自主活動への取組み 100%による中核人材の育成～
- 多様性を理解し、主体的に判断し、協働できる力をもった生徒を育てる。
- 1 少人数授業を特色とする全日制普通科（単位制）と進学講習で、一段高いレベルで希望の進路を実現
  - 2 伝統の部活動と主体的な学習の両立を通じて自分で判断する力、自分で考えて行動する力のある生徒を育てる
  - 3 学校行事と自主活動を通じて、創造する力と心の豊かさを育む

## 2 中期的目標

- 1 少人数授業を特色とする全日制普通科（単位制）と進学講習で、一段高いレベルで希望の進路を実現
  - (1) 生徒が安心して国公立大学をめざすことを選択できる環境を実現する。
    - ア 授業と、講習・個人指導・面談・懇談等とのバランスのとれた教育課程のマネジメントのもとに、すべての生徒の第一志望の進路を実現する。
    - イ 講習を計画的に実施し、第一志望の進路を実現する。
    - ウ 1・2年次において職業ガイダンスや履修ガイダンスを行い、生徒が自己理解を深め自分自身の進路に展望をつとともに、次年度の適切な履修決定を行えるよう支援する。
    - エ 3年次においては、模擬テスト等のデータを活用した進路検討会を行い、一人ひとりの生徒の状況に合った進路決定を支援する。
    - オ 全日制単位制が一段高いレベルで希望の進路を実現できる特色ある課程であることを発信し、中学生の進路選択に資する。
  - ※ 平成 31 年度に、国公立大学及び難関私立大学の現役合格数の割合を卒業生数比で 80%にすることを目標とする。
  - (2) 知識・技能の定着を図るとともに、思考力、判断力、表現力をはぐくむ授業を行う。
    - ア 思考力・判断力・表現力を育むことをテーマとした公開授業及び授業研究の機会を設け、教員の授業力を高めるとともに、学校全体の授業力を高める。
    - イ 進路指導や学力向上の特色ある取組みや先進的な取組みを行っている学校を訪問し、その取組みを報告研修で共有し、実情にあわせて学校経営に反映する。
  - ※ 平成 31 年度に、授業アンケートの有益感の指標を 3.2にすることを目標とする。
  - (3) 安全で安心な学校づくり
    - ア 学年初めの早い時期に全生徒の面談を行い、担任・学年団として生徒状況の共通理解を形成し、適切な支援と不登校の未然防止を図る。
    - イ 担任会、学年会、職員会議で、生徒情報の共有と共通理解の形成を図り、学校全体で一人ひとりの生徒への適切な支援を行う。
    - ウ 生徒の欠席遅刻状況を「見える化」できるシステム・仕組みを整備し、不登校など支援の必要な生徒への迅速で適切な初期対応を行う。
  - ※ 平成 31 年度に、遅刻、欠席、不登校の対在籍生徒比率を、平成 28 年度年度比で半減とする。
- 2 自主活動及び伝統の部活動と、学習の主体的な両立を通じて自分で判断する力、自分で考えて行動する力のある生徒を育てる
  - (1) 部活動と主体的な学習が両立できる環境の整備
    - ア 安全・自主的自律的・円滑に部活動が運営されるよう適切な活動時間の設定や指導者の確保などの環境整備と支援に取り組むとともに、授業外の学習時間の確保と自学自習の習慣の確立を図り、部活動と学習の両立を実現する。
    - イ 部活動を通じて高い目標を掲げ、諦めず力を尽くす姿勢を獲得し、第一志望の進路の実現につなげる。
  - (2) 部活動を通じて自分で判断する力、自分で考えて行動する力のある生徒を育てる。
    - ア 部活動を通じて、100%の力を発揮できる心身の育成を図る。
    - イ 部活動において、中学生との交流や地域の行事への参加をすすめ、地域に愛される学校づくりと部員の自己肯定感の育成をすすめる。
    - ウ 市岡高校の部活動で育成される力及び生徒が自主的自律的に運営を行っている市岡高校の部活動の魅力中学生に向けて発信する。
  - ※ 平成 31 年度に、部活加入率 90%にすることを目標とする。
- 3 創造する力、心の豊かさを育む学校行事
  - (1) 総合的な学習の時間の充実
    - ア ユネスコスクールとしての国際、地域、防災、人権の学習を通じて多様性を理解し、協働し自主的・自律的に物事に取り組む力を育成する。
    - イ これまでの総合的な学習の時間の取組みをまとめて学校としてのアーカイブを作成し、総合的な学習の時間の学びを、より効果的に行える仕組みを確立する。
  - (2) 学校行事、特別活動等における生徒の育成。
    - ア 体育祭、文化祭、合唱コンクール等を通して、組織において自主的・自律的に協働できる生徒を育てる。
    - イ 文楽・落語・能狂言の古典芸能鑑賞、クラシック音楽鑑賞等の特色ある行事を通して、芸術・芸能に関する理解と豊かな感性を養う。
    - ウ オーストラリア語学研修やコミュニケーションツールとしての英語の運用能力を高める機会や大学等が実施するコンテストなどへの参加・出品を推奨し、多様性の理解の深化、表現力・コミュニケーション能力及び生徒の達成感や自己肯定感の育成を図る。
    - エ 各教科における校外の機関や団体との連携を強化し、生徒に有益な活動を推進していく。
    - オ 日本の産業の最先端や、持続可能な開発や発展など、ユネスコスクールにおける多様性の理解の一端として、修学旅行を実施する。
  - ※ 平成 31 年度に、学校行事、自主活動に関する肯定的評価を 90%にすることを目標とする。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔平成 29 年 12 月実施分〕	学校協議会からの意見
<p>&lt;満足度&gt;生徒 85%、保護者 92%、教員 97%教職員。良好だが、生徒と教職員の 10%の乖離が課題。</p> <p>&lt;生徒支援・教育相談&gt; 生徒支援・教育相談の項目の肯定的回答が生徒の 73%に対し教職員 82%と 10%の乖離がある。満足度の乖離の要因の一つと考えられる。</p> <p>&lt;行事・自主活動・進路指導総・総合的な学習&gt; 生徒、保護者、教員の肯定的回答は高く差異も小さい。良好と評価できる。</p> <p>&lt;授業&gt; 生徒の授業に関する肯定的回答は75%。一方、教職員相互の授業見学38%、問題解決的な学習指導は 61%と授業改善の取組みをどう進めるかが考える必要がある。</p> <p>&lt;ガバナンス・マネジメント&gt; ・具体的な取組の評価・検証と次年度への反映の事項の肯定的評価が 59%、分掌と学年団等の連携の肯定的評価が 64%と、校長の生徒像・学校像の発信、校内人事・職務分担、服務規律の項目よりも 10~15%低い。教職員が協働する文化の醸成が課題。</p>	<p>&lt;第 1 回&gt;学校教育自己診断の質問内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校教育自己診断では、生徒自身の主体性を問うものがあったもよい。</li> <li>・生徒が自己反省できる項目をいれたらよい。前向きな自分を引き出せたらよい。「この学校の先生の取組みで自分が成長していると感じる」「授業や様々な取り組みに、主体的に取り組んでいる」など、生徒自身と学校に対する項目とを組み合わせることで評価に対する責任感が生徒に生まれる。</li> </ul> <p>&lt;第 2 回&gt;学校教育自己診断、学校経営計画と学力について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入試と定期考査のギャップを感じさせ、普段の定期考査で聞かれる内容の重要性を感じさせることが大切。自分はわかっているが、演習が足りなかったと思っている生徒は予備校での指導に難しさがある。自分はわかっていないと思っている生徒はそれからの頑張り次第で伸びる。</li> <li>・自学自習については、勉強合宿に来た生徒の事後のフォローアップが大切。</li> </ul> <p>&lt;第 3 回&gt;学校教育自己診断の結果、平成 29 年度学校評価、平成 30 年度学校経営計画</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自学自習については、2 年生で減少する傾向がある。平成 30 年度の自己評価の評価指標に入れてはどうか。</li> <li>・生活指導については、生徒の背景を理解したうえで指導することが大切。</li> </ul>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 全日制単位制と進路講習による一段高いレベルでの希望の進路の実現	<p>(1) 生徒が安心して国公立大学をめざすことを選択できる環境を実現する。</p> <p>(2) 知識・技能の定着を図るとともに、思考力、判断力、表現力をはぐくむ授業を行う。</p> <p>(3) 安全で安心な学校づくり</p>	<p>(1) ア 進学講習を計画的に実施し、第一志望の進路を実現する。</p> <p>(2) ア 思考力・判断力・表現力を育むことをテーマとした公開授業・授業研究週間を設け、学校総体の授業力を高める。 イ 先進的な取組みを行っている学校を訪問し、その動向・取組みを報告研修で共有し、実情にあわせて学校経営に反映する。 ウ 教材教具の整備を図り、多様な教科・科目の授業内の充実を図る。 エ 学級文庫の充実を図り、朝の読書を通じて、思考力の基盤となる広い教養、読解力を要請する。</p> <p>(3) ア 学年初めの面談等により生徒の状況を担任が把握するとともに担任団及び学年団で生徒情報を共有し、適切な生徒への関わりと支援を行う。 イ 担任による粘り強い指導及び生徒指導部と協働した取組みにより、遅刻と欠席のない自律的な生活習慣の確立を図る。</p>	<p>(1) 過去 5 年の実績と今後の高校卒業生数の動向を考慮し、下記の人数を目標とする。 &lt;現役及び既卒&gt; 難関国公立大学 5 名 &lt;現役&gt; 国公立大学 30 名 難関私立大学 160 名</p> <p>(2) ア 生徒授業アンケートの「知識や技能が身に付いた」の項目の学校平均 3.10 を目標とする。 イ 報告研修の実施と平成 30 年度学校経営計画への反映 ウ 生徒授業アンケートの「授業分析」の項目の前年度(3.02)比改善。 エ 朝読関連の意識調査の肯定感の「知識の幅が広がった」(3 年次生の過去 2 年の平均：21%)「勉強に役立った」(15%)の向上。</p> <p>(3) ア 不登校(年間 30 日以上)の欠席の前年比 3 分の 1 減を目標とする。 イ 遅刻、欠席の前年比 20%減を目標とする。</p>	<p>(1) &lt;現役及び既卒&gt; 難関国公立大学 5 名 &lt;現役&gt; 国公立大学 36 名 難関私立大学 130 名 ○ ・難関私立大学については、大学における定数管理が厳しくなった環境で、良好な結果と評価している。</p> <p>(2) ア 生徒授業アンケートの「知識や技能が身に付いた」の項目の学校平均は 3.15。学校としての授業力は高まっている。◎ イ 12 月に広島県立広島皆実高校・広島市立基町高における数学の学力向上、取組の成否と教員の負担について報告研修を行った。 1 月に京都府立宮津高校・兵庫県立三田祥雲高校における国公立大学への進学、全日制単位制の効果的な運用について報告研修を行った。 学校経営計画の作成にあたり「取組みの成否と教員の負担」を参考にする。○ ウ 生徒授業アンケートの「授業分析」の項目の学校平均は 3.11 で大幅に向上。◎ エ 「知識の幅が広がった」(25%)「勉強に役立った」(14%)。概ね良好と評価している。○</p> <p>(3) ア 不登校(年間 30 日以上)の欠席の前年比 8%減少。具体的な取組内容が功を奏したと評価している。○ イ 遅刻が 9%減少、欠席が 4%減少。遅刻は 4 月から 6 月は増加していたが、その後の取組みで減少に転じた。夏休み明け以降の取組みにより、自律的な生活習慣の確立が進んだと高く評価している。◎</p>
2 習得する力、判断力、活動力、主体的な学習の育成	<p>(1) 部活動と主体的な学習が両立できる環境の整備</p>	<p>(1) ア 生徒が自主的・自律的に部活動を運営できるよう顧問が支援を行うとともに、ノークラブデイの着実な実施など、授業外の学習時間の確保と自学自習の習慣の確立に学校として取り組む。 イ 部活動と学習活動が両立できる環境及び部員の人数により差がつくことのない活動環境を実現し、加入率 90%を目標に部活動を一層活発にする。 ウ 学習習慣の確立のために学校行事として自学自習合宿を実施し、生徒の自学自習の習慣の確立の支援及び学習活動の核となる集団の育成を図る。</p>	<p>(1) ア 1 年次の授業外学習時間 2 時間の実現を目標とする。(H28 年度 1 時間) 3 年生については 9 月時点で毎日 4 時間の授業外学習の実現を目標とする。(新規項目) イ (H28 年度 96.4%) 加入率の向上。 ウ 自学自習合宿の実施。参加生徒の有効感 75%を目標とする。</p>	<p>(1) ア 1 年生の授業外学習時間 1 時間 1 分 3 年生の授業外学習時間 5 時間 27 分(1 年生は 9 月、3 年生は 12 月時点の調査となった。) イ 加入率 97%。目標の 90%は理想の数値。箏曲、天文地学など小人数の部も活動を継続し、外部の行事にも積極的に参加するなど活発に活動している。○ ウ 事後アンケート(4 段階評価)の「成果があった」の項目の肯定的回答は 100%、「学習への集中」「自習という形態」「もう一度参加したい」の項目の肯定的回答の平均が 84%であった。 より効果的な取組みにしていきたい。◎</p>
3 通じて、創造する力と心の豊かさを育む	<p>(1) 総合的な学習の時間の充実</p>	<p>(1) ア 過去 3 年間の総合的な学習の時間のアーカイブ化と、年間を 3 期に分けた実施状況の一覧表の作成を行い、総合的な学習の時間を効果的に実施する。 イ 総合的な学習の時間について、生徒の成長が顕著にみられた取組み及び新たな取組みについて職員会議で報告研修を行い、成果の共有を通じて学校として質の向上を図る。</p>	<p>(1) ア アーカイブ等の作成と S ドライブでの共有。(H29 年 7 月まで) イ 生徒アンケートによる効果の検証 ・記述回答による生徒の成長、実感、肯定感の把握。 ・肯定的な回答(75%)を目標とする。</p>	<p>(1) ア アーカイブ等の作成と S ドライブでの共有を平成 29 年 7 月までに完了。事後評価の高い取組の継続と教員の負担感(「ストレスチェック」における仕事の負担感)の減少に寄与したと評価している。○ イ JAICQA の協力によるアフリカ人留学生との交流などで高い評価を得ている。 ・学校教育自己診断での肯定的回答は 80%であった。 充実した取組みができた。◎</p>